

Title	観光の一形態としてのエコツーリズムとその特性
Author(s)	敷田, 麻実; 森重, 昌之
Citation	国立民族学博物館調査報告, 23: 83-100
Issue Date	2001-09-05
Type	Departmental Bulletin Paper
Text version	publisher
URL	http://hdl.handle.net/10119/16923
Rights	本著作物は国立民族学博物館の許可のもとに掲載するものです。This material is posted here with permission of the National Museum of Ethnology. Copyright (C) 2001 国立民族学博物館. 敷田麻実, 森重昌之, 国立民族学博物館調査報告, 23, 2001, pp.83-100. http://dx.doi.org/10.15021/00002085
Description	

観光の一形態としてのエコツーリズムとその特性

敷田 麻実

(金沢工業大学工学部)

森重 昌之

(パシフィックコンサルタンツ(株)新事業開発本部)

A Study on the Ecotourism as a Type of Tourism and its Characteristics

Asami Shikida

(Kanazawa Institute of Technology)

Masayuki Morishige

(Pacific Consultants Co., Ltd.)

1980年代以降、エコツーリズムは新しい形態の観光として脚光を浴びている。エコツーリズムは自然環境や地域社会に大きな負荷を与えるマスツーリズムの欠点を解消した観光として期待されているが、一方で単なる名前だけのエコツーリズムが存在していることも事実である。そこで、本稿では観光の定義を明らかにした上で、エコツーリズムを観光の一形態として捉え、「自然環境への負荷を最小限にしながらかそれを体験し、観光の目的地である地元に対して何らかの利益や貢献のある観光」と定義づけた。そして、エコツーリズムの特性として、①自然環境に与える影響を最小限にする努力、②観光地である地元での利益の創出、③自然環境を理解し、コミュニケーションする努力の3点を挙げた。

Ecotourism is a new type of tourism activity that has become widespread since the late 1980's. It is expected to mitigate the detrimental effects of mass tourism such as resource degradation of the destination area and exploitation of the local economy. However, a lack of a clear definition of ecotourism has created many eco-sell types of ecotourism. Thus, this paper intends to articulate the definition of ecotourism by relevant ecotourism literature review. The result of the study shows that there are a variety of definitions based on different situation of each ecotourism activity. The authors concluded that ecotourism can be defined as a type of tourism that contributes to the

destination area economically and socially while trying to minimize the environmental impacts to the destination area. In addition, ecotourism is considered to have at least three factors, namely enhancement of conservation, promotion of tourism and contribution to regional society and economy.

1. 緒言	4. エコツーリズムの同義語
2. エコツーリズムの誕生と経緯	5. エコツーリズムの特性
3. エコツーリズムの定義	6. 結言

Key words: ecotourism, definition, environment, profits to the destination

キーワード：エコツーリズム, 定義, 自然環境, 地元の利益

1. 緒言

エコツーリズム (ecotourism または eco-tourism) は、自然環境を保護しながら観光資源として利用しようとする新しい形態の観光として注目を集めている。1990年代以降、日本でもエコツーリズムを紹介する文献や報告が増えており、観光産業のパンフレット類やメディアにもエコツーリズムやエコツアーという言葉が日常的に現れ、自然環境や地域社会に大きな負荷を与えるマストツーリズム (mass-tourism) の欠点を解消した観光として、エコツーリズムは期待されている。

最近ではエコツーリズム以外にもエコライフ (ecolife) やエコビジネス (ecobusiness)、エコショップ (ecoshop)、エコマネー (ecomoney) など、「エコ」を付加した言葉は数多い。これらはいずれも自然環境や生態系の保全・保護を意識した命名であり、エコツーリズムも同じ基盤を持つものと考えられる。しかし一方で、顧客の興味を引いて販売に結びつけるために、何でも「エコ」をつけるという安易な選択の傾向も見られる。実際、単に「エコ」を冠しただけと思われるエコトラベル (ecotravel)、エコバケーション (ecovacation)、エコベンチャー (ecoventure)、エコクルーズ (ecocruise) などの言葉がツアー広告などに見られる (Cater 1992)。自然環境への配慮に欠け、単にマーケティングの必要性から「エコ」を付けただけのエコツアーも広まりつつあり、本来のエコツーリズムとの混乱が生じている。

また、国内の新聞などのメディアもエコツーリズムやエコツアーを取り上げている。例えば、1992年9月2日付けの読売新聞では“ブームを呼ぶエコツアー”という見出しがすでに出ている。記事の内容は、旅行代金の一部を自然保護に寄付するエコツアーを旅行会社が始めたというものであり、ここでは直接的な寄付を通じて自然保護に貢献する観光を「エコツ

アー」としている。旅行代金の一部を寄付に回すことの是非について本稿では問わないが、自然保護団体への寄付だけでエコツアーが成立するとされていることは問題であり、エコツーリズムに参加すれば自然保護につながるという単純なものでもない。むしろマストツーリズムの一形態とすべき観光をエコツーリズムと呼称する例も見られる。

このようにエコツーリズムの台頭とともに、エコツーリズムがまるで自然保護のための活動であるかのような誤解や混乱がしばしば見受けられる。その原因として、エコツーリズムについて考える際に、観光と全く切り離してエコツーリズムという言葉を用いていることが考えられる。そこで、本稿では自然環境を対象とした観光の歴史的な経過を辿りつつ、エコツーリズムの誕生とその経緯を整理した上で、観光の一形態としてエコツーリズムを定義づける。そして、エコツーリズムの定義からその特性についての分析を試みることにした。

2. エコツーリズムの誕生と経緯

エコツーリズムは自然環境を保護しながら観光資源として利用しようとする新しい形態の観光であると述べたが、もともと観光は自然環境を対象とする例が多い。手つかずの自然や優れた環境は文化遺産や歴史的建築物と並んで重要な観光資源であり、古くから観光対象として認められていた (Valentine 1990)。例えば、オーストラリアを訪問する日本人観光客の約3分の1は、野生のペンギンを見学できるフィリップ島を訪ねている (山村 1990)。また、北部オーストラリアの都市ケアンズは、グレートバリアリーフと熱帯雨林への観光で急激に発展し、日本人観光客が絶え間なく訪れている。さらにコスタリカでは、広大な国立公園を訪問する観光客からの収入が外貨収入源で第3位に位置づけられている (Romeril 1989)。

このように、大自然や優れた環境が観光産業と観光客の両方から重要な観光資源として認められてきたことは事実であり、多くの観光客が参加するマストツーリズムの1種として古くから存在していた (Young 1986)。その例としては、サファリツアーや登山などが挙げられる。もちろん、それらは現在定義されているエコツーリズムとは差があり、特に自然環境に対する学習という点では不十分であると思われる。正確に言えば、単なる「自然環境鑑賞型観光」であるかもしれない。しかし、自然環境を対象としたこのような観光の歴史的な経過が十分に認識されないと、現在のエコツーリズムが特別な存在であることは説明できない。

それでは、エコツーリズムは正確にはいつから注目されるようになったのであろうか。Grenier et al. (1993) は、「エコツーリズムの創始は1965年にHetzerによって示された生態学的観光 (ecological tourism) である」と主張している。その後1980年代までは、生物学者や地理学者、またその分野に関心の高い観光客がガラパゴス諸島を訪れる観光について、科学的観光 (scientific tourism) と名付けている例はあるが (Laarman & Durst 1987)、他に目立った定

義はない。もっとも Budowski (1976) は、「環境と観光の関係には両立 (coexistence) , 対立 (conflict) , 共生 (symbiosis) があり, 対立を超えた共生という相互の利益が保証される状態がある」ということを早くから予想していた。

1980年代になると, エコツーリズムは観光パンフレットやメディアに現れ, 観光分野で日常的になり始めた。Williams (1992) は1980年代に入って自然環境に関心を持つ観光客のグループが現れたと報告しており, 佐藤 (1990) もやはり“自然と環境に優しい”観光が1980年代に入って欧米で見直されていると述べている。また, 1990年までに発表されたエコツーリズムに関する文献のうち, 60%が1987年から1990年までの3年の間に発行されている (Valentine 1990)。従って, 実際にエコツーリズムが本格化したのは1980年代からと考えるのが妥当であろう。

エコツーリズムの1980年代からの拡大には, どのような背景や契機があったのであろうか。この点について, Boo (1992) は「自然保護分野と観光産業の両方の要望が一致した」と分析した。つまり自然保護分野からは, 開発と自然保護の調和や自然保護に対する経済的インセンティブの設定という要望があった。逆に観光産業からは, 観光資源としての自然環境の再評価, 環境学習に対する観光客の要求の増大があった。また, Budowski (1976) は観光が自然保護地域で果たす役割の重要性について早くから取り上げており, 観光と自然保護の共存を予想している。加えて, 1980年代後半からの自然保護運動の高まりがこの傾向を助長したと考えられる。以上のように, 自然保護と観光産業の利害の一致が, エコツーリズムの発生の原因であると考えられる。

しかし, その後エコツーリズムが注目を集めるほど普及した原因について, これまで体系的に分析した研究は少ない。その中で, Lindberg et al. (1998) はエコツーリズムが普及した理由について次の3点を挙げている。それは①自然環境に対する関心の高まり, ②(特に小学校での) 環境教育の普及, ③自然環境に関するメディア報道の拡大である。①については, ヨーロッパ各地で緑の党の勢力が拡大したことや, 1988年の先進国首脳会議で環境問題が議題になったことから分かるように, 世界的な自然保護運動の高まりが1980年代に起こっている (岡島 1990) ことが挙げられる。②については, 1980年代ではないが, 環境教育を専門とする大学・大学院などの設立が1970年のアースデイを契機に米国で増え, 1980年代の停滞期を超えて1990年代に再び活発化している (森 1998) ことなどを示すことができる。③については, 環境問題に関するメディア報道が, 環境問題やその対策の重要性の認識とともに世界的に増加していることから明らかである。

ところで, 観光産業の拡大は1960年代以降一貫した傾向であるが, その中で1980年代前半は世界的な景気悪化による観光客数の停滞が起こった (Pearce, 1987, French, et al. 1995)。この時期はその危機を解決しようとして, 観光産業が魅力のある観光を模索していたと考えられ

る。そこへ世界的な環境重視の機運が重なって、エコツアーリズムが1980年代後半に発展したのではなかろうか。エコツアーリズムで有名なオーストラリアのカカドゥー国立公園への観光客が急激に増えたのは1980年代後半であり(ANU 1995)、世界的な自然環境に対する関心の高まりと、より特化したタイプの観光に対する要求が一致して、エコツアーリズムが普及・拡大したものと考えられる。

一方で、世界標準になっていたマスツーリズムが、多くの問題を引き起こしていることへの解決策としてエコツアーリズムが発展したという主張は多い。ところが、エコツアーリズムをマスツーリズムのアンチテーゼと位置づけることに対しては異論もある(エコツアーリズム推進協議会 1999)。つまり、エコツアーリズムは資源に対する配慮を持っているが、マスツーリズムにはそれがないという考え方に対して、両者は質的に異なる観光であるという主張である。しかし、エコツアーリズムが今日のように隆盛する以前は、パッケージ化されたマスツーリズムが主流であったことを考慮すると、マスツーリズムの存在がエコツアーリズム発生の背後条件であったことは事実である。特に、マスツーリズムが自然環境に与える悪影響には無視できないものがあり(McElroy & deAlbuquerque 1990 ほか多数)、それに対する反省が基底にあったと思われる。また日本でも、マスツーリズムやそれに関連するリゾート開発によって自然環境の破壊が多発し、観光開発の内容が問題になっている例は多かった(佐藤 1990, 三木 1990 など)。このような状況の中で、マスツーリズムに代表される、従来型観光にはなかった自然環境に配慮した観光であるエコツアーリズムが、マスツーリズムの欠陥を補う観光として注目を集め出したと考えることが自然である。

3. エコツアーリズムの定義

エコツアーリズムは、「自然保護の手段」として特別に取り扱われることもあるが、あくまでも観光の一形態である。従って、小沢(1992)が指摘しているように、観光の定義を明らかにしてからエコツアーリズムについて分析することが重要である。大きく見れば、観光はレジャー活動の一部であり、人間の行動を対象としているので、一定の基準でその領域を定義することは難しい。しかし、対象とする分野の範囲を明らかにしないかぎり、問題解決はできない。そのため、Smith(1989)も指摘している通り、観光について分析を試みる際には定義を明確にし、研究対象を限定しておくことが基本的な課題である。本稿が対象としたエコツアーリズムについても、観光の一形態であることに変わりはない。従って、観光自体の定義を明確にしてからその内容について言及する必要がある。

この点については敷田(1994)が指摘しているが、その後日本で報告があったエコツアーリズムの定義は、観光の位置づけを明確にしないままに定義を試みているものが多い。この傾

向はツーリズムを日本語の「観光」と切り放して使用しているために余計に強まっている。また、エコツーリズムを自然保護運動と関連して紹介する例が多いため、エコツーリズムが環境問題の解決手段であるかのように錯覚し、その手段自体が持つ危うさを覆い隠し、誤った認識を生む原因となっている。そこで、本稿では観光の定義を明らかにした上で、観光の一形態としてのエコツーリズムの分析を試みる。

まず、観光 (tourism) については、エコツーリズムが台頭する以前から数多くの定義が発表されている (Lea 1988 など)。しかし、研究者や統計作業がその目的に見合う定義を必要としていたことから、その後も含めて国や機関によっていくつもの定義が発生してきた (シーアボルト 1995 など)。実際のところ、広義の観光は自分の居住地以外を訪問する行為とそれに関連することであり、そのポイントは移動距離と滞在時間であるとされている (Pigram 1983)。

こうした観光の定義では、観光と観光客 (tourists) を区別して定義する例が多い (Pearce 1989)。まず、観光の定義は「レジャーやレクリエーションを目的として旅行し、一時的に滞在することから派生する現象」とするのが一般的である (Pearce 1989)。また、観光の要素をより分析的に扱った例として、「観光とは日常生活圏以外の目的地への人々の一時的移動、目的地での滞在中に従事する活動および参加者の欲求を満たすための手段である」とする Mathieson & Wall (1982) の定義がある。ここで観光についての重要な要素は、日常生活圏を離れることと移動である。その他に経済的分析のために観光を定義した例 (Smith 1989) や、地理的な要素に着目した例 (Boniface & Cooper 1987) などもある。

次に観光客については、「レクリエーションやスポーツ・健康を目的として、24時間以上1年以内滞在する旅行者とする」という OECD の定義があり (OECD 1993)、国際観光における統計はこの定義を採用している。しかし国内旅行者については、各国でそれぞれの基準を採用している例が目立つ。例えば米国では、全米観光資源調査委員会 (National Tourism Resource Review Commission) が、自宅から約 80 km 離れたところまで出かける旅行者を観光客としている (シーアボルト 1995 など)。

一方、国内における観光の定義は、観光に関する研究や著作の中でまとめられてきた。山村 (1974) は 1974 年に、観光とは「休養や教養のために人が日常生活圏を離れて移動すること」と定義した。この定義は山村 (1990) によって再度確認されている。また、足羽 (1988) は、観光政策審議会が 1969 年に内閣に答申した「国民生活における観光の本質とその将来像」の中で示された、「日常生活圏を離れて異なった場所での行動が観光に特徴的である」ということを観光の定義として採用している。このように日本における「観光」の定義は、「日常生活圏ではない場所へ何らかの手段で移動し、休養・教養などのレクリエーション活動に従事すること」と考えられる。

日本における観光の定義に共通することは、滞在時間に関する具体的な規定がないことである。これについては、統計的目的以外で滞在時間による観光の分類の重要性は低いという山村（1990）の指摘もある。また、最近の観光学辞典（長谷編 1997）の定義でも時間には触れていない。しかし、社会経済学的解析が目的になる場合は、滞在時間について具体的に定義する必要があると思われる。特に、観光経済学ではこれが重要である（小沢 1992）。このように考えると、OECD の定義のように「観光は24 時間以上の滞在（つまり宿泊を伴う）である」とする定義が観光の境界を明瞭にできる。特に、レクリエーションと観光の関係を考える場合には重要な区分になると思われる。そこで、本稿では「宿泊を伴う日常生活圏以外での休養や教養のための活動」を観光として扱うことにする。

観光の定義を明らかにしたところで、エコツーリズムの定義に言及する。エコツーリズムの創始は、Grenier et al.（1993）が主張したように、1965 年に Hetzer によって示された生態学的観光であるとされる。しかし Honey（1999）は、「ラテンアメリカの国立公園に関する仕事で、Miller が1978 年にエコツーリズムの概念を生み出したのが創始である」と述べている。また、エコツーリズムを比較的早い時期に使用した例として、Young（1986）の文献がある。Young は自然環境と調和しながら持続し、地元にも利益が還元される観光をエコツーリズムと呼んだ。さらに、Romeril（1985）は Budowski が1976 年に環境と観光の共生を提唱した時よりも、観光産業が自然保護に関わる度合いが現在は増えているとしている。

エコツーリズム協会（The Ecotourism Society）は、エコツーリズムとは「自然環境を保全し、地元住民の福祉の向上につながる責任ある旅行」であると比較的単純に定義している。しかし、エコツーリズムに関する定義はこれ以外にも数多い。マスツーリズムの対極としてのエコツーリズムには批判もあるが（エコツーリズム推進協議会 1999）、一般的にはマスツーリズムからの「もう一つの選択肢（alternative to mass tourism）」であると考えられている（Cater et al. 1994）。また、それは以前から議論されてきたオルタナティブツーリズム（alternative tourism）や適切なる観光（appropriate tourism）などと多くの共通点を持ち、“Small is beautiful.”の哲学を持つと言われている（Hector Ceballos-Lascurain 1996）。この哲学は、ドイツの経済学者シューマッハーが述べた「中間技術」（シューマッハー 1986）を観光分野で実現していくことであると考えられる。

ここで、今までの研究や報告で発表されているエコツーリズムの定義を整理した（表1 参照）。数多くの定義が示されているが、その共通点は「基本的に自然環境を享受することに関係する」ということである。地域への還元や環境学習機能の付加を条件とする定義もあるが、すべての定義にそれらが備わっている訳ではない。ただし、短期的に自然環境を搾取するのではなく、持続的に自然環境を利用し享受していこうという特徴が、いずれの定義にも認められる。

表1 エコツーリズムの定義に関する報告や文献

時期	エコツーリズムの定義	発表者
1990年	Booの定義を紹介し、「エコツーリズムはnature tourismの同義語であり、景観や野性の動植物そして文化的存在を高く評価し、研究し、そして享受するという特定の目的を持って、比較的人的破壊や汚染を受けていない(undisturbed and uncontaminated)地域を旅行すること」とした。	Valentine
1991年	比較的人為的变化を受けていない自然が残っている場所で、風景や生物・植物を観察するという特別な目的を持った観光。これまでの観光との違いは自然の中へ入っていき、自然を観察・理解すること。	ラスクライン
1991年	エコツーリズムとはnature tourismの一種であり、より一層進んだ形のもの。nature tourismより目的性が高く、自然を守り、維持する観光である。	Farrell & Runyan
1991年	自然環境に根ざした観光。参加者は自然愛好家。	Whitlock & Becker
1992年	自然保護地域の発展のために資金を創出する、地域社会の住民に雇用機会を創出する、ビジターに環境教育機会を提供することにより、自然保護や自然保護区づくりを進める自然志向型の観光。	横山
1992年	広く定義すれば、自然の生態系に魅力を感じることが基本となっている観光。狭く定義すれば、責任ある旅行で自然保護と地元住民の福祉の重要性を強調する観光。	Cater
1992年	明確な定義はない。持続的な、環境に優しい観光のもう1つの選択肢という意味である。	Cater
1992年	環境に与えるダメージを最小限に抑えながら、自然に触れ、自然環境を研究・探勝する旅行。	日本自然保護協会
1992年	自然とのふれあいを大切にする旅。	日下部
1992年	生態学的旅行、自然観察旅行、環境旅行。定着した訳語や定義はまだない。	伊藤
1993年	エコツーリズムはsustainable developmentの理想的な形と考えられる。	Miller
1994年	Ecotourism is nature travel that advances conservation and sustainable development efforts.	Boo
1994年	多くの国立公園や保護区は観光客が増加しており、特に先進高所得国または豊かな都市からの観光客が多い。このような観光を指す。	Healy
1994年	エコツーリズムという言葉は、観光客が自然の生態系を訪れたいとする気持ちと、訪問によって生ずる保護利益を有する。	Healy
1996年	エコツーリズムは広い意味のオルタナティブツーリズム。エコツーリズムとオルタナティブツーリズムの差はtouristとtravelerの差のような言語レベルの差。	太田
1996年	リゾート造成に代表される乱開発に代わる「秩序ある観光」の未来を予見するモデルの1つ。	太田
1997年	自然環境の保全を強く主張する観光。「環境に優しい観光」であるが、単に自然環境を観光対象としているだけではない。	長谷
1999年	「一定の地域の生態系に影響を及ぼすことなく、自然の動植物を鑑賞し、理解を深めることを目的にした観光のあり方」。小規模少人数で環境や文化の学習が目的であり、環境への配慮と資源管理機能を備え、貴重な自然や文化を対象とした場所で行われる。	エコツーリズム推進協議会

結局、現在考えられているエコツーリズムは、エコツーリズム推進協議会（1999）が主張するように「多様」であり、1つの決まった形態（ステレオタイプ）はなく、むしろ自然環境を基盤とした観光の総称や分類として使われる傾向がある。もちろん、その際には従来型の自然環境鑑賞型観光とは異なり、基盤となる自然環境への負荷を最小限にすることが必要である。そして、次に観光の目的地である地元に対して何らかの貢献があること、その社会にとっての利益があることが重要である。ただし、後半の観光の目的地に対する貢献は、「まず自然環境に与える影響を最小にする」ことが達成されていることが最低条件である。これらから、「自然環境への負荷を最小限にしながらそれを体験し、観光の目的地である地元に対して何らかの利益や貢献のある観光」がエコツーリズムであると定義できる。

4. エコツーリズムの同義語

エコツーリズム以外にも「自然環境を楽しむための観光」の同義語が複数使用されている。まず、一般的なのがネイチャーベースドツーリズム（nature-based tourism）である。Valentine（1990）はこの言葉の簡潔な定義を「基本的に自然環境を楽しむことに関する観光」とした。また、ネイチャーベースドツーリズムは1種類ではなく、広い範囲の観光を指すことも述べている。また、Boo（1990）はエコツーリズムをネイチャーツーリズム（nature tourism）の同義語として使っている。

これと似た言葉に自然志向型観光（nature-oriented tourism）がある。Laarman & Durst（1987）はネイチャートラベル（nature travel）や自然志向型観光を「教育やレクリエーション、時に冒険を取り入れたスタイルの観光」と説明した。また Grabum et al.（1989）は「写真撮影や録音などに従事するだけの、観光地にできるだけ訪問の影響を及ぼさない形態の観光」を生態学的観光（ecological tourism）と分類した。そして、自然環境を対象とした観光である環境観光（environmental tourism）でも、釣りやスキー、海水浴など、自然環境を利用するだけの観光をレクリエーション観光（recreational tourism）として区別している。その他にもエコツーリズムの類義語が報告や文献の中に多く見られる。このようなエコツーリズムの類義語を整理した（表2 参照）。いずれも従来のマスツーリズムではない新しいタイプの観光を模索する動きを示している。

表2 エコツーリズムの類義語

時期	内 容	発表者
1974年	「教養観光」 研究や自然観察、史跡巡りなどを主目的とした地理理解に視点を置いた観光。	山村
1986年	「Special interest tourism」 バードウォッチングや植物観察など特別なテーマに関連した観光。	Troumbis
1989年	「Nature tourism」	Romeril
1989年	「Environmental pilgrimage」 ガラパゴス島を早い時期に訪れた観光客を称して呼んでいる。	Kenchington
1990年	「ソフトツーリズム」 欧米で1980年代に入って見直されたツーリズムのあり方。	佐藤
1990年	「Nature-based tourism」 基本的に自然を楽しむことに関係する観光。1種類の均質なものではなく、広い範囲の観光を指す。	Valentine
1992年	Soft, green, eco-, gentle, appropriate, responsible など「新しい観光」にはいろいろな名前が付けられていると紹介。	Wheeller
1992年	「Alternative tourism」 Appropriate tourism の同義語。しかし、誰にとって appropriate なのか考えることが大切。	Butler
1993年	マスツーリズムを見直し、より「適切なるツーリズム」を目指す動きも起こっている。	高田
1993年	「ネオトラベリズム」 バックツアーに代表されるマスツーリズムがいきわたると、危険・困難・トラブルに出会うことが要素になっているツアーを売り出す。	高田
1993年	「Adventure tourism」	A Level Analysis Advisory Panel
1994年	「ソフトツーリズム」 Draper and Raviel (1990) から引用し、内発的発展論に近い観光と分析。	鶴田

5. エコツーリズムの特性

こうした新しい観光も含めたエコツーリズム全体に共通する特性は何であろうか。それがエコツーリズムと従来型のマスツーリズムを区別する点であると考えられる。そこで、本稿ではエコツーリズムが目指しているもののうち、マスツーリズムにはない特性について考えることにする。

まず、今までに言及されてきたエコツーリズムの特徴を整理した（表3参照）。そこから、エコツーリズムに共通する特性を1つに絞ることは難しいことが分かる。しかし、そこに共通するものは優れた自然資源の存在とその保護、地域への配慮と経済的貢献などである。本稿では、特にその中でも以下の3点を強調したい。

表3 エコツーリズムの要件・特徴・規準についての言及

テーマ	内容	発表者と時期
エコツーリズムガイドライン	エコツーリズムガイドラインの策定プロセスは、①現状調査、②課題抽出、③方針・手法の検討、④原案作成とレビュー、⑤ガイドライン策定、⑥公表と普及である。	エコツーリズム推進協会 (1999)
Nature-oriented tourismの要件	Nature-oriented tourism では、基本的に少人数の観光であり、無制限な来訪者の増加を嫌う。	Valentine (1990)
日本自然保護協会 (NACS-J) の企画するエコツーリズムの要件	<ul style="list-style-type: none"> • 目的地に魅力がある • 自然理解のための研究 • 研究結果が保全活動に制度的に生かされる • 環境教育とガイドの存在 • ガイドに対する必要な対価の支払い • ビジターに自然理解の要望がある • ツアーオペレーターから、参加者への事前情報提供がある 	横山 (1992)
Nature-oriented tourの特徴	Nature-oriented tour を提供する旅行会社の調査から <ul style="list-style-type: none"> • ツアー客の扱いは少ない • 女性や個人の参加が多い • 地域の民宿などを利用し、地域住民との接触がある 	Ingram & Durst (1989)
Eco touristの特性	Eco tourist は自分の住環境と異なった状況を好むので、発展途上国にある未整備な施設でも満足できる。その結果、外来資本の導入を積極的にしなくても良いという効果もある。	Valentine (1990)
Ecotourismの要件	Hetzer (1965) の responsible tourism について、 <ul style="list-style-type: none"> • 環境への最小の負荷 • 地域文化への最小の負荷かつ最大の賛辞 • 目的地の地域住民 (grass roots) への最大限の経済的利益 	Grenier et al. (1993)
Eco-tourismの規準	<ul style="list-style-type: none"> • 他にない自然環境 • 特別な常連客 • 環境に配慮した利用 • 環境保全に対する経済的支援 • alternative use からの経済的利益 • 直接費用補償 	Holland, Ditton, & Graefe (1998)
Ecotouristの規準	<ul style="list-style-type: none"> • 自然理解を優先する • 原生自然や保全地域を重要視する • 全旅程の3分の1以上をケニアサファリ (目的地) で過ごす (ケニアを訪れるカナダ人観光客の調査から) 	Ballantine & Eagles (1994)
エコツーリズムの要件	<ul style="list-style-type: none"> • 自然地域があること • 調査研究の実施 • 調査研究結果の保護への還元 • ツアーオペレーター側からの自然解説 • ツーリスト側からの積極的姿勢 	伊藤 (1992)
エコツーリズムの基本	エコツーリズムはガイド付きの小規模ツアーが基本である。	エコツーリズム推進協議会 (1999)
Ecotourismの特徴	エコツーリズムが従来の自然鑑賞型観光と異なるのは、 <ul style="list-style-type: none"> • エコツーリズムによる地域振興 • マスメディアによる積極的な取り上げ 	Young (1986)
従来の観光とエコツーリズムの差	「資源開発→整備→観光利用」というサイクルに資源管理の要素が含まれているかどうか。	エコツーリズム推進協議会 (1999)

まず第1に、自然環境に与える影響を最小限にする努力である。従来の観光が自然環境との共生ではなく、むしろ対立する関係になって観光公害と言われるような悪影響を自然環境に与えていたことに比べると、大きな差である。

第2に、今までの自然環境鑑賞型観光にはあまり認められなかった観光地、地元での利益の創出である。自然環境を楽しむだけの観光は開発を必要としないため、観光地での付加価値創出には結びつかないと従来考えられてきた。しかし、優れた自然環境が観光客を集める魅力は大きく、自然環境を楽しむだけの観光でも地元（観光地）の経済に貢献することが世界各地で実証されてきた。このように自然保護だけではなく、自然環境を利用して地元を経済的利益をもたらすことが、エコツーリズムの特性である。実際、自然保護区の設定と地元の経済的利益追求の両立可能性を肯定する研究例はこれを支持している（Dixon et al. 1993）。

第3の特性は自然環境を理解・コミュニケーションするための努力である。これは調査・研究の形をとることもあれば、エコツアーの中で環境学習の機会が設定される場合もある。これまでの自然環境鑑賞型観光は、表面的な美しさや風景を鑑賞することに重点が置かれていたが、エコツーリズムでは自然環境を理解し、コミュニケーションすることが観光の目的であり、参加する観光客もそれに対して高い関心を持っている。また、こうした理解・コミュニケーションが進めば自然環境に与える影響に敏感になり、結果的に観光が自然環境に与える影響の減少も期待できる。もちろんこの点については、自然環境を理解すればそれに負荷を与えない行動を取るか、という検証は必要である。

また、Valentine (1990) が述べているように、エコツーリズムに最低限必要なことは優れた自然環境とそれを楽しむという姿勢であろう。エコツーリズムは自然環境と密接に関連しており、時には自然環境の変化によって観光内容が悪化することもある。例えば、天候が悪く目的の地域に入れないとか、目当ての生物に出会えないということが挙げられる。このように自然環境に対する依存性は従来の観光よりも強い。

6. 結言

1980年代以降、エコツーリズムは観光分野において日常的になってきたが、同時にエコツーリズムに対する誤解や混乱も生じている。本稿では、観光の一形態としてエコツーリズムを捉えたが、自然環境を対象とする観光は古くから見られ、エコツーリズムもこれに端を発する。そして、Boo (1992) が指摘するように、自然保護分野と観光産業の利害の一致がエコツーリズムの発生の原因であると考えられる。その後、世界的な自然環境に対する関心の高まりと、より特化したタイプの観光に対する要求が一致して、エコツーリズムは世界各地で普及した。

エコツーリズムの定義は多様であり、自然環境を基盤とした観光の総称や分類として使われる傾向がある。本稿では、基盤となる自然環境への負荷を最小限にすることと、観光の目的地に対する貢献を鑑みた上で、エコツーリズムを「自然環境への負荷を最小限にしながらそれを体験し、観光の目的地である地元に対して何らかの利益や貢献のある観光」と定義づけた。また、エコツーリズムの特性として、①自然環境に与える影響を最小限にする努力、②観光地である地元での利益の創出、③自然環境を理解し、コミュニケーションするための努力の3点を挙げた。

日本の地域の多くは現在、急激な少子・高齢化が進行し、財政制約によってシビルミニマムの確保が困難になるなど、厳しい環境下に置かれている。エコツーリズムは手近な自然環境を観光資源として利用できることに加えて地域経済への貢献が期待できるので、自然保護を訴える側にも経済的な利益を求める側にも受け入れやすい地域振興策であり、地域活性化の一助になると期待されている。しかし、本稿で示したように、エコツーリズムは自然環境に影響を与える可能性のある観光の一形態であるということを認識しなければ、エコツーリズム本来の意義が失われ、自然環境や地域社会に大きなインパクトを与えることにもなりかねない。従って、エコツーリズムの定義や特性で掲げたように、自然環境への負荷を最小限にするという前提が重要である。本稿で示したエコツーリズムの3つの特性を理解した上で、地域が主体的にエコツーリズムの実現を追求していけば、持続可能な地域社会の実現に結びつくことも可能であると考えられる。このエコツーリズムの発展過程については別稿に譲りたい。

文 献

A Level Analysis Advisory Panel

1993 Happy Holidays or Conservation Nightmares? *Geographical*, Nov. 1993:53-55.

ANU(Australian Nature Conservation Agency and North Australian research Unit)

1995 *ANU Kakadu: Natural and Cultural Heritage and Management*, Australia:Griffin Press.
足羽洋保

1988 「観光学を学ぶために」小池洋一・足羽洋保編『観光学概論』pp.1-14, ミネルヴァ書房.

Ballantine, J. L. & Eagles, P. F. J.

1994 Defining Canadian Ecotourists, *Journal of Sustainable Tourism*, 2(4):210-214.

Boniface, B. G. & Cooper, C. P.

1987 *The Geography of Travel and Tourism*, London: William Heinemann Ltd..

Boo, E.

1990 *Ecotourism: The Potentials and Pitfalls Volume1*, Baltimore:World Wildlife Found Publications.

1992 「エコ・ツーリズム計画」薄木三生訳, 『国立公園』501:2-7.

1994 *The Ecotourism Boom, Planning for Development and Management*. WHN Technical Paper Series.

Budowski, G

1976 Tourism and Environmental Conservation: Conflict, Coexistence or Symbiosis ?, *Environmental Conservation*, 3(1): 27-31.

Butler, R.

1992 Alternative Tourism: The Thin Edge of the Wedge, In V.L. Smith and W. Eadington (eds), *Tourism Alternatives*, pp.31-46. West Sussex: John Wiley and Sons.

Cater, E.

1992 Profits from Paradise, *Geographical Magazine*, 64: 16-21.

Cater, E. et al.

1994 *Ecotourism: a Sustainable Option?* New York: John Wiley and Sons.

Dixon, J. A., Scura, L. F. & van't Hof, T.

1993 Meeting Ecological and Economic Goals, Marine Parks in the Caribbean, *AMBIO*, 22(2-3),117-125.

エコツーリズム推進協議会

1999 『エコツーリズムの世紀へ』 エコツーリズム推進協議会.

Farrell, B. H. & Runyan, D.

1991 Ecology and Tourism, *Annals of Tourism Research*, 18: 26-40.

French, C. N. et al.

1995 *Principles of Tourism*, Melbourne: Longman.

Graburn, N. H. et al.

1989 Tourism: The Sacred Journey, In Smith, V. L.(ed.), *Hosts and Guests: The Anthropology of Tourism*, pp.21-36. Philadelphia: University of Pennsylvania Press.

Grenier, D., Kaae, B. C., Miller, M. L. & Mobley, R. W.

1993 Ecotourism, landscape architecture and urban planning, *Landscape and Urban Planning*, 25(1):1-16.

長谷政弘編

1997 『観光学辞典』同文館出版.

Healy, R. G.

- 1994 Tourist Merchandise: as a Means of Generating Local Benefits from Ecotourism, *Journal of Sustainable Tourism*, 2(3) : 137-151.

Hector Ceballos-Lascurain

- 1996 *Tourism, Ecotourism and Protected Areas: The state of nature-based tourism around the world and guidelines for its development*, Cambridge: IUCN.

Holland, S. M., Ditton, R. B. & Graefe, A. R.

- 1998 An Ecotourism Perspective on Bilfish Fisheries, *Journal of Sustainable Tourism*, 6(2) :97-116.

Honey, M.

- 1989 *Ecotourism and Sustainable Development: Who Owns Paradise?* Washington: Island Press.

Ingram, C. D. & Durst, B.

- 1989 Nature-oriented Tour Operators: Travel to Developing Countries, *Journal of Travel Research*, Fall 1989 :11-15.

伊藤秀三

- 1992 「ガラパゴス国立公園のエコ・ツーリズム」『国立公園』501:8-13.

Kenchington, R. A.

- 1989 Tourism in the Galapagos Islands: the Dilemma of Conservation, *Environmental Conservation*, 16(3):227-232,236.

日下部甲太郎

- 1992 「自然公園とエコツーリズム」『国立公園』506: 12-18.

Laarman, J. G & Durst, P. G

- 1987 Nature Travel in the Tropics, *Journal of Forestry*, 85(5) : 43-46.

ラスクライン C. H.

- 1991 「エコツーリズムって何なんだ?!」『自然保護』351: 4-8.

Lea, J.

- 1988 *Tourism and Development in the Third World*, London: Routledge.

Lindberg, K. et al.

- 1998 *Ecotourism: A Guide for Planners and Managers*, North Bennington: The Ecotourism Society

Mathieson, A. & Wall, G

- 1982 *Tourism: Economic, Physical and Social Impacts*, New York: Longman.

McElroy, J. L. & deAlbuquerque, K.

1990 Managing Small-island Sustainability: Towards a Systems Design, *Nature Resources*, 26(2):23-29.

三木健

1990 『リゾート開発』 三一書房.

Miller, M. L.

1993 The rise of coastal and marine tourism, *Ocean & Coastal Management*, 20(3):181-199.

森哲郎

1998 『アメリカの環境スクール』 大修館書店.

日本自然保護協会

1992 「ニュースダイナマイト」『自然保護』 362:28-31.

OECD

1993 *Coastal Zone Management: Integrated Policies*, Paris: OECD.

岡島成行

1990 『アメリカの環境保護運動』 岩波書店.

太田好信

1996 「エコロジー意識の観光人類学：ベリーズのエコツーリズムを中心に」石森秀三編『観光の20世紀』 pp. 207-222, ドメス出版.

小沢健市

1992 『観光の経済分析』 文化書房博文社.

Pearce, D. G.

1987 *Tourism Today: A Geographical Analysis (Second Edition)*, Essex: Longman.

1989 *Tourist Development*, Essex: Longman.

Pigram, J.

1983 *Outdoor Recreation and Resources Management*, New York: St. Martin's Press.

Romeril, M.

1985 Tourism and the Environment Towards a Symbiotic Relationship, *AMBIO* 25: 215-218.

1989 Tourism and the Environment-Accord or Discord? *Tourism Management*, Sep. 1989 : 204-208.

佐藤誠

1990 『リゾート列島』 岩波書店.

シーアボルト W. F.

1995 『観光の地球規模化：次世代への課題』 晃洋書房.

敷田麻実

- 1994 「エコツーリズムと日本の沿岸域におけるその可能性」『日本沿岸域会議論文集』
6: 1-15.

シューマッハー E. F.

- 1986 『スモール・イズ・ビューティフルー人間中心の経済学』小島慶三訳, 講談社.

Smith, S. L. J.

- 1989 *Tourism Analysis*, Essex: Longman.

高田公理

- 1993 「旅行文化の発展ー人類史的視点から」井上俊編『現代文化を学ぶ人のために』
pp.209-231, 世界思想社.

Troumbis, A. Y.

- 1991 Environmental Labeling on Services: the Case of Tourism, *Ekistics*, 58: 167-173.

鶴田英一

- 1994 「観光地理学の現状と課題：日本と英語圏の研究の止揚に向けて」
『人文地理』46(1):66-84.

Valentine, P. S.

- 1990 Nature-Based Tourism: A Review of Prospects and Problems, *Proceedings of Congress
on Coastal and Marine Tourism*, pp.25-31.

Wheeller, B.

- 1992 Alternative Tourism: A Deceptive Ploy, *Progress in Tourism, In Cooper C. P.(ed.),
Recreation and Hospitality Management*, 4(4):140-145.

Whitlock, W. & Becker, R. H.

- 1991 Nature-based Tourism: An Alternative for Rural Coastal Economic Enhancement,
Coastal Zone, '91(2):1046-1051.

Williams, A. M. & Shaw, G.

- 1992 『観光と経済開発ー西ヨーロッパの経験』廣岡治哉訳, 成山堂書店.

山村順次

- 1974 「観光地理学序説」山村順次・浅香幸雄編『観光地理学』大明堂.
1990 『観光地域論ー地域形成と環境保全ー』古今書院.

横山隆一

- 1993 「エコ・ツーリズムを進めるために」『アニマ』5月号:65.

Young, A. M.

1986 Eco-enterprises: Eco-tourism and Farming of Exotics in the Tropics, *AMBIO* 15(6) :
361-363.

【付 記】

本稿は社団法人北陸建設弘済会第5回「北陸地域の活性化」に関する研究助成事業（平成11年度）「都市と中山間地域の交流・連携の視点から見たエコツーリズムのあり方についての研究」の成果の一部である。